

〔研究ノート〕

他者から嫌われることを避ける傾向の個人差

Avoidance of “being disliked by others”;
individual differences and interpersonal recognitions

河野和明*・羽成隆司**・伊藤君男*

Kazuaki KAWANO, Takashi HANARI, Kimio ITO

キーワード：対人嫌悪，対人認知，他者から嫌われること，個人差

Key words : interpersonal disgust, interpersonal recognition, being disliked by others,
individual difference

要約

他者から嫌われること（被嫌悪）を避ける傾向の測定を試みた。他者から嫌われる人の特徴はいくつか先行研究で示されている。そこで、その特徴を示さないようにしようとする傾向を含み、他者から嫌われることを避けようとする意思、動機づけ、感情を盛り込んだ質問項目（21項目）を作成して実施した。項目の因子構造は男女でほぼ同一であった。他者から嫌われる特徴を避けようとする傾向はすべて「被嫌悪回避」因子に高い負荷を示した。この因子への負荷量が高い上位10項目を被嫌悪回避尺度と見なし、因子分析を行ったところ尺度の一因子性は高く、高い一貫性が示された（ α 係数.91）。さらに、自分を嫌っている他者の数、自分に好意をもっている他者の数、自分が嫌っている他者の数、友人数、親友数、コミュニケーション頻度についてそれぞれ自己報告をもとめ、被嫌悪回避尺度得点との相関を分析した。その結果、被嫌悪回避尺度得点は、男女ともこれらすべての測定変数と有意な相関を示さないことが明らかとなった。被嫌悪回避的な心理傾向を測定する意義が考察された。

Abstract

A psychological scale was developed in order to measure degrees of “avoidance of being disliked by others (ABD)”. The general characteristics of persons who are disliked by others were shown in previous studies. Twenty-one questionnaire items were made to ask about tendencies to not want to show these characteristics, and degree of intention, motivation and emotion to avoid “being disliked by others”. Factor analysis showed a

similar factorial structure of the items in male and female responders. All items asking about tendencies to not want to show the characteristics had high values of factor loading to the first factor. The ten items that showed highest factor loading to the first factor constructed the ABD scale. Unidimensionality of the 10 items was confirmed by using factor analysis, and Cronbach's α was .91. The questionnaire also included items to ask the number of others who dislike the responder, and others who like the responder, others whom the responder dislike, in addition to the number of friends and close friends, and chat frequency. The ABD scale showed no significant correlation with all of these measured variables. The implications of ABD were discussed.

問題

対人嫌悪感の重要な機能のひとつは、広義の有害な他者を避けることにあると考えられる。たとえば、嫌悪の文化進化理論 (Rozin et al., 2000) によれば、嫌悪感はもともと、有害な物質を摂取することを阻止する機能をもつ「まずい味」に関する反応として発生し、病気や感染の原因となる対象物に対する嫌悪、動物的性質の対象物に対する嫌悪、対人嫌悪、道徳的嫌悪へと拡張された。いずれの対象についても、嫌悪感をもつことが接触の回避や防止につながり、結果的に適応に寄与していると考えられる。筆者らのグループはこれまで、他者との身体接触や身体的接触への拒絶を伴うより強い嫌悪（接触回避）を検討し（河野ら, 2010, 2012）、適応論的な予測とおおむね一致する結果を得てきた（羽成ら, 2010; 羽成ら, 2011; Kawano et al., 2011）。

対人嫌悪を感じる相手の特徴は、因子分析的検討（斎藤, 2003）によると「自分との相違」「相手への妬み」「相手の傲慢さ」「相手の自己中心性」「相手の主張過剰」「自分との類似」「相手の外見」「相手の話し方」の8因子が示されている。また、対人嫌悪の類似概念として対人苦手意識をとりあげた研究（日向野・小口, 1998; 日向野, 2008）では、苦手な人の態度特徴として、「自己中心性」「うっとうしさ」「感情的な態度」「えらそうな態度」「いいかげんさ」「思いやりのなさ」「魅力・有能さ」「性格・会話の不一致」「内向性」「身体・個人的特徴」「つかみどころのなさ」「態度のうらおもて」「依存性」「陰険さ」「無視・無反応」が指摘された。

これらはいずれも、一般的にはさほど重大な社会的損害を与えないことがらや些細なことがらが大半であると思われるものの、自分の社会的な立場や利益が直接的・間接的に相手から浸食される事態を示す因子（相手の自己中心性・傲慢さ・偉そうな態度、相手への妬み・相手の魅力など）が共通して多く挙げられている。このことは、人が自己の社会的立場と利益についてきわめて敏感であり、それらが大きく損なわれる可能性に対して未然に回避・防止するべく嫌悪感を発動させていることを示唆する。

Trivers (1971; トリヴァース, 1991) は、対人的な好悪感情をはじめとした人間に特徴的な社会的感情が互恵的利他性 (reciprocal altruism) を維持していることを指摘した。これによれば、好意はその対象者に対して協力的にさせる一方、嫌悪はその相手に対して非協力的にさせる機能をもつ。そして、他者に好意を感じて友人関係を作る傾向、友人や好意を感じる人に対して利他的にふるまう傾向は、利他的関係を形成する直接的な感情的基盤となる。一方、対人嫌悪感、自己利益を追求して相互の利他性を損なう人に対して向けられ、友人関係を破壊するように作用する。結果的に、人は対人的な好悪感情によって特定他者と互恵的な関係を形成するようになると主張されている。

対人嫌悪に関する心理学的研究はさほど多くないものの、以上のように、嫌いになることについてはこれまでいくつかの視点から論考がなされてきた。では逆に、「嫌われる」ことを人はどうとらえているのであろうか。これが本研究の主題である。

他者から嫌われる特徴の上記のような点は、いずれも常識的・経験的に考えて容易に了解できるものであり、意外性のある項目は皆無と言ってよいだろう。すなわち、人はどのようにしたら他者から嫌われるか知悉しているのである。それに加えて人は、あまりに他者から嫌われると結果的に自己利益を損なうことも知っている。嫌われれば関係を避けられがちになるので、嫌われた人物は社会的資源の一部を失うことになるし、場合によって悪意のある噂などによる関係性攻撃 (Crick & Grotpeter, 1995) の対象となるかもしれない。ある人が利己的でなく相互に協力が可能な人物か否かを知る手がかりとして評判を利用しているという知見 (Nowak & Sigmund, 1998) からして、こういった関係性攻撃は当人にとって大きな損失となる可能性がある。また、こういった利害の認知を別にしても、他者から嫌われている状態は多くの場合非常に不快であり、自分を受け入れない者が多い集団内で過ごすことはしばしば耐えがたい精神的苦痛をもたらす。「いじめ」などで意図的に集団から嫌悪的に振る舞われる状況に陥った際の苦痛がきわめて大きいことは、経験したことがない者でも容易に想像できる。

したがって、人は、デフォルトとして他者から極端に嫌われないように努めているといえる。つまり、前述のさまざまな嫌われる特徴を人はできるだけ示さないようにしようとする傾向をある程度もちあわせている。これによってわれわれは、他者の利益を尊重し、価値観や態度を相手にあわせ、コミュニケーションを円滑化しようとするように方向付けられているだろう。そしてそれが、互恵的利他性の維持に一定の役割を果たしているものと思われる。

とはいえ、「他者から嫌われることを避ける」傾向には、シャイネス (相川, 1991) や罪悪感 (有光と今田, 1999) などの社会的感情と同様、個人差が存在していると予想される。そして、この傾向は社会性に関する認知や社会的資源量とある程度関係を持っている可能性が考えられる。嫌われまいとする努力によって利己的な行動が単純に抑えられるのであれば、良好な社会関係を示唆する諸特徴と相関を示す可能性がある。一方、この心理的傾向が強いことは、過去の人

間関係によって痛手を受けた経験や対人関係に対する過敏さをも示唆するので、社会関係の悪さを示す特徴と相関する可能性もある。

そこで本研究では、嫌われることに対する抵抗感の機能を今後継続的に検討する手始めとして、他者から嫌われることを避ける心理的傾向（以降、「被嫌悪回避」傾向と呼ぶ）を測定する尺度を構成する。そして、尺度の信頼性について検討した後、対人関係に関する認知として、自分を嫌っている他者の主観的な人数、自分を好きな他者の主観的な人数、自分が嫌いな他者の人数との関係を明らかにする。さらに、被嫌悪回避の程度が、社会的資源量である友人数やコミュニケーションとどのように関係するかを分析する。

方法

対象者 東海地方の学生、計 387 名（男性 190 名、女性 197 名）を調査対象とした。平均年齢は 19.99 歳（年齢範囲 18～25 歳、SD=1.36）であった。

質問紙 質問紙は以下の項目を含む多数の項目から構成されていた。なお、下記以外の他の心理尺度等も投入されたが、本報告ではそれらに言及しない。

(1) 被嫌悪回避傾向を測定する項目

他者から嫌われることへの抵抗感を測定する尺度を作成するために、嫌われることを避けようとする意志、動機づけ、嫌われることに対する否定的感情を含む項目を複数作成した。これらに加えて、先行研究（斎藤，2003）で析出された 8 因子のうち、「相手の話し方」「自分との類似」を除いた 6 因子（「自分との相違」「相手への妬み」「相手の傲慢さ」「相手の自己中心性」「相手の主張過剰」「相手の外見」）について、これらの状態を避けようとする傾向を測定する内容の項目を作成した。具体的には、「自分との相違」に対して「つきあいのある人から、考え方や趣味がまるで違う人だと思われたくない」、「相手への妬み」に対して「人からねたまれることはできるだけ避けたい」、「相手の傲慢さ」に対して「ごう慢なやつだと絶対に思われたくない」、「相手の自己中心性」に対して「できるかぎり自己中心的な人間だと思われたくない」「自分勝手な人だとしてできるかぎり思われたくない」、「相手の主張過剰」に対して「嫌われそうなら、あまり自己主張をしないようにしている」、「相手の外見」に対して「外見で相手に不快な印象を与えないように気にしている」の、7 項目であった。さらに、他者から好かれること・嫌われることに対して固執しない程度や重要度認知に関する項目を加えた。重複する項目を整理して最終的に 21 項目が選定された（表 1 を参照）。

(2) 被嫌悪人数・被好意人数・嫌悪人数

対人関係に関する認知を測定するための質問項目を設定した。ここでは、実際に身の回りの他者からどの程度嫌われていると主観的に感じているかを測定するために、「今現在も直接顔をあわせる人物で、あなたのことがあまり好きでないと思っていたり、あなたに対して苦手意識をもっている」とあなた自身が感じる人」の具体的な数を男女ごとに尋ねた。同様に、身の回りの他者からどの程度好かれていると主観的に感じているかを測定するために、「今現在も直接顔をあわせる人物で、逆に、あなたに対して好意や好感をもっている」とあなた自身が感じる人」の具体的な数（親・きょうだい・親戚を除く）を男女ごとに尋ねた。さらに、「あなたが今現在も直接顔をあわせる人物で、あまり好きでない人、苦手な人」の具体的な数を男女ごとに尋ねた。

(3) 社会的資源量およびコミュニケーション頻度

回答者の社会的資源量を測定するために、「会ったときに気軽に話のできる友人（以下、友人）」、「個人的なことを相談できる友人（以下、親友）」、「個人的なことを相談できる親戚または家族（以下、相談可能親族）」の、それぞれの人数を具体的な数字によって回答を求めた。また、日常的なコミュニケーション頻度を測定する目的で、友人や家族とのおしゃべり（あいさつや用事以外のくだけた会話とした）頻度を尋ねた（以下の6選択：毎日、何度も話す；毎日、1～2回話す；およそ毎日～2・3日に1度は最低でも話す；2・3日に1度～1週間に1度は最低でも話す；1週間に1度～1カ月に1度は最低でも話す；それ以下の頻度）。

結果

項目の因子分析および尺度作成 被嫌悪回避を測定する21項目に対して回答者の男女ごとに因子分析（主因子法）を行ったところ、男女の因子構造はほぼ同一であった。そこでこれ以降、男女込みのデータで因子分析を行った。固有値の減衰状況および固有値1以上の基準から、2因子性が示された（説明率：第一因子 32.9%；第二因子 10.2%）。項目に対する因子負荷量を示す（表1）。

第一因子には、「自分勝手な人だとできるかぎり思われたくない」「イヤな人だと思われぬようにいつも注意している」「できるかぎり自己中心的な人間だと思われたくない」などの項目が高い負荷を示し、これらは全体に、被嫌悪状態を避けようとする傾向を示す項目であった。そのため、第一因子を「被嫌悪回避」と命名した。先行研究（斎藤, 2003）で示された嫌われる特徴について、その特徴をもたないようにしようとする傾向を測定する意図で作成した7項目はすべて第一因子に高い負荷を示した。

第二因子には、「人に嫌われるかどうかにかかわらず仕方がない」「人に好かれることにこだ

表1. 被嫌悪回避を測定する尺度の項目と因子負荷量（主因子法2因子解; バリマックス回転）

項目番号	項目	第一因子	第二因子
19	自分勝手な人だとできるかぎり思われたくない	.789	-.008
11	イヤな人だと思われまいようにいつも注意している	.772	.122
12	できるかぎり自己中心的な人間だと思われたくない	.772	.011
4	人から嫌われることは、もっとも避けたい事のひとつだ	.742	.300
8	人に好かれるように振る舞う事は、私にとって重要だ	.701	.293
14	人から嫌われるのが怖いと思う	.656	.306
7	誰かが私を嫌っていることがわかったら、とてもショックだと思う	.646	.250
5	多少の我慢をしても、いい人だと思われたい	.642	.262
9	嫌われそうなら、あまり自己主張をしないようにしている	.616	.071
1	誰からも好かれていたい	.599	.248
3	ごう慢なやつだと絶対に思われたくない	.593	.099
17	人からねたまれることはできるだけ避けたい	.572	.014
6	人から嫌われると、とても損をと思う	.566	.139
2	私を嫌う人が何人いても、私は平気だ	-.480	-.401
13	つきあいのある人から、考え方や趣味がまるで違う人だと思われたくない	.467	.106
18	外見で相手に不快な印象を与えないように気にしている	.458	-.051
10	人から好かれることは自分のためになると思う	.447	.144
20	人に嫌われるかどうかにかかわらず仕方がない	-.238	-.659
15	人に好かれることにこだわるのは、ばかげた事だと思う	-.025	-.637
21	人に好かれるかどうかには、あまり関心がない	-.361	-.583
16	人から好かれなくても仕方がないと思う	.060	-.507
説明済分散		6.902	2.145
寄与率		.329	.102

わるのは、ばかげた事だと思う」「人に好かれるかどうかには、あまり関心がない」「人から好かれなくても仕方がないと思う」が高い負荷を示し、これらは全体に、他者から好かれること・嫌われることに対して固執しない程度や重要度の認知に関する項目であった。そのため、第二因子を「被嫌悪に対する無関心」と命名した。項目「私を嫌う人が何人いても、私は平気だ」は両因子に同程度の負荷を示した。

本研究の関心は被嫌悪を避ける心理的傾向にあるので、第一因子に高い負荷を示した項目によって心理尺度の作成を試みた。まず、第二因子および両因子に高い負荷を示した5項目を除いて再度因子分析を実施した。明らかに一因子性を示したので、負荷量絶対値.6以上の項目を選択したところ、10項目（因子負荷量の高い順に「人から嫌われることは、もっとも避けたい事のひとつだ」「イヤな人だと思われまいようにいつも注意している」「自分勝手な人だとできるかぎり思われたくない」「人に好かれるように振る舞う事は、私にとって重要だ」「できるかぎり自己中心的な人間だと思われたくない」「人から嫌われるのが怖いと思う」「多少の我慢をしても、いい

人だと思われたい」「誰かが私を嫌っていることがわかったら、とてもショックだと思う」「誰からも好かれていたい」「嫌われそうなら、あまり自己主張をしないようにしている」となった。これらを尺度と見なした場合の α 係数は.91であり、高い一貫性を示した。また、当該項目を除いた合計得点に対する各項目の相関係数は.59～.75であった。G-P分析を行ったところ、すべての項目に高い弁別力が認められた。 α 係数が当該項目除外前より増大する項目はなかった。これらの結果から、選択した10項目が被嫌悪回避尺度として妥当であると判断し、その合計得点を被嫌悪回避得点とした。

被嫌悪回避尺度得点の平均値は、男性 34.65(SD=9.00)、女性 36.74(SD=7.96)であり、有意に女性が高かった ($t(373)=2.38, p<.05$)。なお、標準偏差は女性に比べて男性が大きく、この差には有意傾向があった ($p=.095$)。

測定項目間の相関 被嫌悪人数・被好意人数・嫌悪人数や社会的資源量およびコミュニケーション頻度に関する測定項目との相関を男女ごとに示す(表2)。

表2. 被嫌悪回避得点と他の測定変数との相関係数：上段は男性回答者、下段は女性回答者の結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1: 自分を嫌いな男性の数										
2: 自分を嫌いな女性の数	.87 **									
3: 自分を好きな男性の数	-.01	.03								
4: 自分を好きな女性の数	.08	.12	.74 **							
5: 自分が嫌っている男性の数	.43 **	.44 **	.14	.14						
6: 自分が嫌っている女性の数	.26 **	.22 **	.10	.10	.60 **					
7: 友人数	.06	.03	.23 **	.17 *	.16 *	.13				
8: 親友数	.02	.05	.36 **	.25 **	.22 **	.06	.54 **			
9: 相談可能親族数	-.07	-.09	.04	.01	-.09	-.02	.16 *	.40 **		
10: おしゃべり頻度	.06	.03	.12	.05	.01	.00	.14	.14	.17 *	
11: 被嫌悪回避尺度	.02	.03	.12	.08	.05	.05	-.11	.10	-.01	-.04
	-.02	-.04	-.14	-.08	.03	.10	-.10	-.06	.03	.07

男性回答者は n=175~186、女性回答者は n=180~193

* $p<.05$, ** $p<.01$

自分を嫌いな男性の数と自分を嫌いな女性の数は男女とも非常に高い相関を示した。これは、同性に多く嫌われていると認知している人は異性にも多く嫌われていると認知していることを示す。一方、自分が嫌っている男性および女性の数は嫌われている数と有意な正の相関を示し、多くの人から嫌われている自覚があればあるほど嫌いな人も多いことが示された。自分を好きな男性の数と女性の数は、両性で高い相関を示した。同性に多く好かれていると認知している人は異性にも多く好かれていると認知していることを示す。自分を嫌っている人の数と友人数、親友数、相談できる親族およびおしゃべり頻度には相関が見られなかった。

一方、自分を好きな男性の数と女性の数は自分が嫌っている男女の数と相関を示さなかった。男女とも、自分を好きな人の数と、友人数、親友数には有意な正の相関が見られた。女性にのみ、自分を好きな人の数と、相談できる親族およびおしゃべり頻度との間に有意な正の相関が見られた。

自分が嫌っている人の数について、自分が嫌いな男性と自分が嫌いな女性との間には男女とも有意な正の相関が見られ、多数の同性を嫌っている人は多数の異性を嫌っていることが示された。男性にのみ、自分が嫌っている人の数と、友人数および親友数との間に有意な正の相関が見られた。

社会的資源量として、友人数・親友数・相談可能親族数の相関を検討した。友人数と親友数には男女とも有意な正の相関が見られ、友人数と相談可能親族数との間には男性のみ正の相関が見られた。気軽なコミュニケーションの量を測定する目的のおしゃべり頻度については、相談可能親族数との間に男女とも正の相関が見られた。

以上のように、対人関係に関する測定変数および社会的資源量に関する測定変数間にはある程度の相関が見られた。しかしながら、ここで作成した被嫌悪回避尺度は男女ともこれらの変数すべてと有意な相関を示さなかった。

考察

被嫌悪回避尺度の一貫性は高く、ここで検討したその他の統計量においても心理尺度として大きな問題は見られない。内容的にも、他者から嫌われる特徴（斎藤, 2003）をもたないようにしようとする傾向を測定する項目はすべて、嫌われることを避けようとする傾向を測定する意図の他項目と同一の因子に高い負荷を示し、これらが心理的に同じまとまりであることが示された。このことは、人はどうすれば嫌われるかを熟知していることを示すものと考えられる。「被嫌悪に対する無関心」を示す項目が別因子に負荷したことは、嫌われることに対する関心やこだわりの多寡は、嫌われたくないという心理傾向とは異なることを示唆する。被嫌悪自体への認知、すなわち嫌悪されることに対するメタ認知が被嫌悪回避とどのような関係をもっているかは今後検討されるべき課題であろう。被嫌悪尺度得点で見られた性差は、女性は男性と比べてより親密な人間関係を築く傾向にある（概説は遠矢, 1996）ことから、嫌われないでいることの重要性が男

性よりも高いことによって生じた可能性がある。

自分を嫌いな男女の数の相関が高いこと、同じく自分を好きな男女の数の相関が高いこと、自分を嫌いな人の数と自分を好きな人の数との間の相関がないことは、他者から嫌われていると感じることと好かれていると感じることは独立であるとともに、嫌われている認知と好かれている認知は、相手の性によらずかなり一定であることが示唆される。

嫌っている人数は嫌われている人数と相関があり、これは、嫌いな他者が多い人は自分も嫌われていると認知する傾向にあることを示す。これらの人数と好かれている人数は関係がないから、「嫌い-嫌われ」の認知は関係するが、嫌いな人の数を好かれている人の数で補う、あるいは、好かれている人が多ければ嫌いな人を少なく見積もるといった一定の関係はなかったと言える。自分を好きな同性が多いほど相談可能親族数が多く、おしゃべり頻度も多いという女性の結果は、特に母親との関係が女性においてこれらの変数に現れやすいことによるように思われるが、この点の検討には対象者と回答者との関係を具体的に尋ねる必要がある。自分が嫌っている男性の数が男性のみ友人数と親友数と正の相関が見られたことは、男性のみが嫌いな同性が多いほど友人関係が強固なことを示唆する。この理由は明らかでないが、嫌いな同性他者の存在によって男性の凝集性が高まりやすいことを示しているのかもしれない。

社会的資源間およびそれらとコミュニケーション頻度との相関は、先行研究（河野，2000；河野，2002）で見られた結果とおおむね類似していた。したがって、ここで得られた結果はある程度の一般性をもつと考えられる。その上で、被嫌悪回避尺度得点は取り上げた測定変数と有意な相関を示さなかった。特に、自分を嫌いな他者の具体的人数は被嫌悪回避に関わる心理特性と直接的な関連をもつと考えられるだけに、この結果は意外なものである。ひとつの可能性として、被嫌悪回避的な心理特性は自分を嫌いな他者の認知と因果関係が錯綜している結果、一定の相関が消失した可能性が考えられる。すなわち、周囲に自分を嫌っている人が多いと認知している人はそれ以上嫌われないために被嫌悪回避的になる一方、嫌われないように普段から努めている人は、周囲とうまく接することができ、実際に嫌われる機会が減少する側面をもつ。同様に、周囲からあまり嫌われていないと認知しているなら、嫌われないようにしようとあらためて努める必要はない。同時に、嫌われないように努力していない人は、嫌われてしまう機会も増えるという側面をもつ。このように双方の因果関係があり得るため相関が現れなくなったのかもしれない。この場合、現在の社会的関係に関する満足度や修復の必要性認知によってこの結果が説明できる可能性がある。

いずれにせよ、他者から嫌われることを避ける傾向は、自分が嫌われていると認知している人数とも、自分を好きな他者の主観的な数とも、自分が嫌っている他者の数とも、見かけ上大きな関連はなかった。しかし、今回の結果は、自分を嫌っている人数と自分が嫌っている人数・自分が好きな人数が極端な差を示す個人や特殊な友人関係スタイルをもつ個人などを考慮し、回答者を分類した分析によってさらに検討を継続する余地がある。さらに、自分を好きまたは嫌いな人数、自分が好き

または嫌いな人数や、社会的資源の量的側面だけでなく、人間関係の質的な側面を含めて分析を行う必要がある。このような再分析に加え、被嫌悪回避傾向の機能を明らかにする測定を実施することによって、この心理特性が社会関係を何を引き起こし得るのか、今後さらに明らかにすることが課題となる。そしてそれは、互いに他者の社会的立場をある程度尊重して互恵的な社会が形成されるメカニズムの一端を明らかにする手がかりとなる可能性をもつ。

引用文献

- 相川充, 1991. 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究. *心理学研究* 62 : 149-155
- 有光興記, 今田寛, 1999. 特性罪悪感尺度作成の試み. *日本教育心理学会総会発表論文集*, 41 : 250.
- Crick, N. R., Grotpeter, J. K., 1995. Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 66: 710-722.
- 日向野智子, 小口孝司, 1998. 青年期の対人関係における苦手意識. *昭和女子大学生活心理研究所紀要*, 1 : 43-62.
- 日向野智子, 2008. 人を苦手になる. In : 加藤司・谷口弘一編, 対人関係のダークサイド, 北大路書房, pp.76-88.
- 河野和明, 2000. 抑制的会話態度の研究—抑制的会話態度尺度・自己隠蔽・自覚的身体症状の関係—. *日本心理学会第64回発表論文集*, p.889.
- 河野和明, 2002. 社会人に対する自己隠蔽尺度 (Self-Concealment Scale) の適用—ストレスイベントおよび自覚的身体症状との関連—. *松山東雲女子大学人文学部紀要*, 10 : 131-136.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2010. 「接触回避尺度」開発の試み. *日本心理学会第74回大会発表論文集*, p.959.
- Kawano, K., Hanari, T., Ito, K., 2011. Contact avoidance towards people with stigmatic attributes: seen from the opposite aspect of mate choice. *Psychological Reports*, 109: 639-648.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2012. 接触回避尺度の尺度特性. *東海学園大学研究紀要*, 17: 155-161.
- 羽成隆司, 河野和明, 伊藤君男, 2010. 父やきょうだいに対する嫌悪感はインセスト回避の表れか? *椋山女学園大学文化情報学部紀要*, 9 : 45-54.
- 羽成隆司, 河野和明, 伊藤君男, 2011. 配偶者選択の点から見た身体に対する接触回避の適応的意義. *椋山女学園大学文化情報学部紀要*, 10 : 91-98.
- Nowak, M. A., Sigmund, K., 1998. Evolution of indirect reciprocity by image scoring. *Nature* 393: 573-577.
- Rozin, P., Haidt, J., McCauley, C. R., 2000. Disgust. In M. Lewis and J. M. Haviland-Jones (eds.) *Handbook of Emotions (2nd Edition)*. pp.637-653. New York: Guilford Press.
- 斎藤明子, 2003. 対人嫌悪感情に対する社会心理学的研究. *九州大学心理学研究*, 4 : 187-194.
- 遠矢幸子, 1996. 友人関係の特性と展開. In : 大坊郁夫・奥田秀宇編, 親密な対人関係の科学, 誠信書房, pp.89-116.

トリヴァース, R. (中嶋康裕・福井康雄・原田泰志 訳), 1991. 生物の社会進化. 産業図書.

Trivers, R., 1971. The evolution of reciprocal altruism. *Quarterly Review of Biology*, 46: 35-57.